

埋文センターニュース

第 4 号

1996.10. 1

津市埋蔵文化財センター



発掘調査で甦った弥生時代の高地性集落（長遺跡）も、調査後は破壊され消滅した。

特集：開発と保存

私たちが便利で快適な生活をおくるためには、新しい道路や建物など様々なものが 필요합니다。けれども私たちが暮らしている場所には、昔の人々の生活のあと「遺跡」が埋もれていることがあります。そんなとき、むやみに工事を行ってしまうと大切な遺跡が破壊されてしまいます。そこで、どうしても壊さな

ければならないところは発掘調査されるのですが、そのために工事が遅れる場合もあることから、開発（工事）と保存（発掘）は、言わば“仲の悪い永遠のライバル”であるかのように言われてきました。でも、本当にそうなののでしょうか？それぞれの立場を考えながら、もう一度冷静に考えてみてはどうでしょう。

開発と保存を考える…

バランスのとれたよりよい
生活環境をつくるために…

■何のための開発？何のための保存？

開発（道路工事や建物建設）は現在の生活のためであり、保存（発掘調査も含めて）された文化財は将来のよりよい生活を考える場合の基礎になるものです。つまり、どちらも私たちの生活をよりよいものにするためであり、本来の目的は同じであるはずなのです。



■どういう場合に発掘が必要になるのか？

大別すると、次の2つの場合があります。

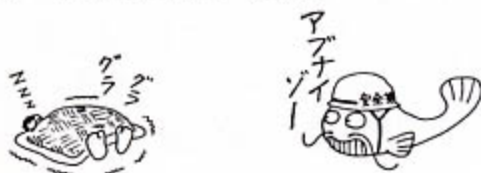
1つは、工事によって遺跡を破壊してしまう場合、または破壊する恐れがある場合。

もう1つは、道路や建物などをつくることによって、今後その場所が発掘調査できなくなってしまう様な場合です。



■文化財（遺跡など）は何の役に立つのか？

これまで文化財というものは、歴史の研究や文化の発展に役立つ「文化的遺産」だと言われてきました。しかし、それだけではありません。特に埋蔵文化財の調査・研究は地域の歴史的・地理的な特性を明らかにしますから、都市計画や防災計画にもたいへん役立つ貴重な一面を持っています。



■歴史に学ぶまちづくり

奈良や京都では、1000年以上も前の町並みが今も生きています。それに比べて新しい時代につくられた都市ほど空洞化現象や再整備の必要性が生じているのはどうしたことでしょう？昔の人ほど地域の特性や環境資源を生かす術を心得ていたように思われます。

それに、どこへ行っても同じ街並み、同じ家並みでは、「歴史的景観」も「土地の風情」もあったものではないでしょう。



—— 発掘が語る災害の情報 ——

昨年1月数多くの死傷者を出した阪神・淡路大震災のあと、阪神地域が地震の多発地帯であることが一般に知られるようになりました。しかし、それを報せる声はもっと前からあがっていたのです。

神戸市灘区に西求女塚^{にしもとめづか}という古墳があります。一昨年の発掘調査で、この古墳は1596年の慶長地震による地滑りで大きく崩れ落ちていたことがわかりました。

もちろんこの事実は発掘調査の成果として公表されました。しかし、その意味を本当に理解できた人は、ほんのわずかだったのです。その結果……。

津市においても納所町の蔵田遺跡^{そうた}で液状化現象による噴砂の跡が見つかっているほか、今夏話題になった安濃津柳山遺跡^{あんのつやなぎやま}は、1498年の明応地震で壊滅したといわれる幻の港湾都市安濃津を思い起こさせてくれます。また市の西部を南北に走る一志断層が活断層であることも考えあわせると、津市も決して安全な地域とは言えないのですが……。

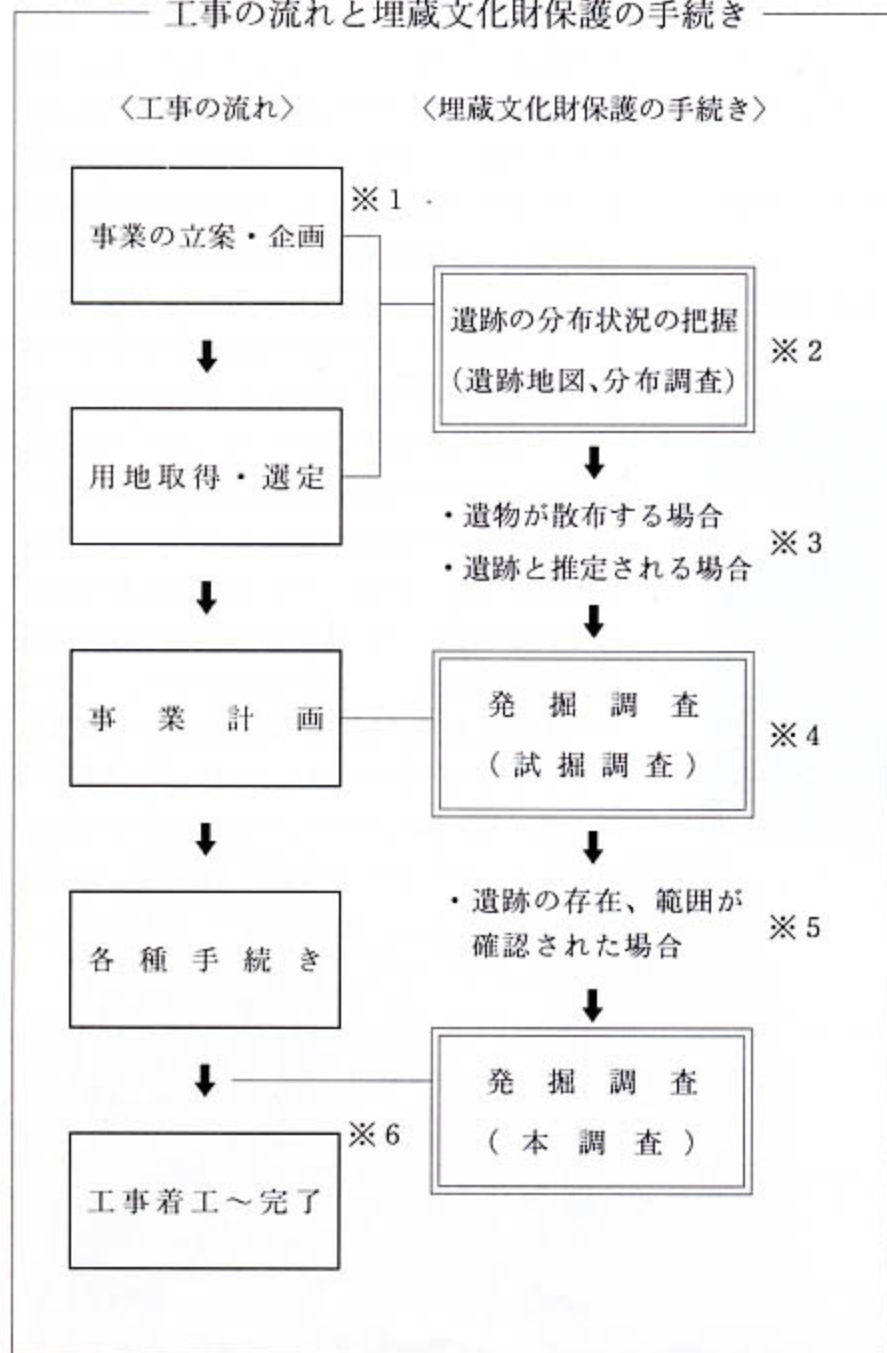
工事を行う前に…埋蔵文化財保護の手続き

埋蔵文化財（遺跡など）があるところで工事（地面を掘る行為すべてを含みます）を行う場合は、あらかじめ遺跡を壊すおそれがないか確認し、どうしても遺跡を避けられない

場合は発掘調査しなければなりません。その手続きの概要は下の表の通りですが、工事の内容によって多少の違いがあります。

詳しいことは下記へお問い合わせ下さい。

工事の流れと埋蔵文化財保護の手続き



＜註＞

- ※1. なるべく早い段階から埋蔵文化財の確認を行うと後の調整にゆとりができます。
- ※2. 概要は「遺跡地図」に記載されていますが、内容は日々変化していますので文化課で確認してください。分布調査は埋蔵文化財センターが無料で行います。
- ※3. 工事の範囲、工法等によって、発掘調査は不要になる場合もあります。
- ※4. 工事範囲内の遺跡の状況を確認します。
- ※5. 計画変更等が可能な場合、発掘調査面積が削減されることもあります。
- ※6. 工事着工は、発掘調査完了後になります。

問い合わせ先：津市教育委員会 文化課 文化財担当

〒514-91 津市西丸之内23-1（津市役所7F） TEL 0592-29-3251

遺跡紹介③

深い堀と土塁をめぐる中世の城

みねじ 峯治城跡

峯治城跡は、津市一身田上津部田の丘陵の端に築かれた戦国時代の城跡です。埋文センターニュース創刊号（1995. 3）でお伝えした上津部田城址からは東側に約500mの距離にあります。明治時代に編纂された地誌『伊勢名勝志』には、佐脇勝久が応永年間（14世紀末～15世紀初頭）に築城し、永禄11年（1568）に織田信長の伊勢進攻によって滅ぼされたと記されています。

発掘調査は、平成元～2年に三重県埋蔵文化財センターが城跡の中心部について行い、平成3年に津市教育委員会がその西側部分を調査しました。

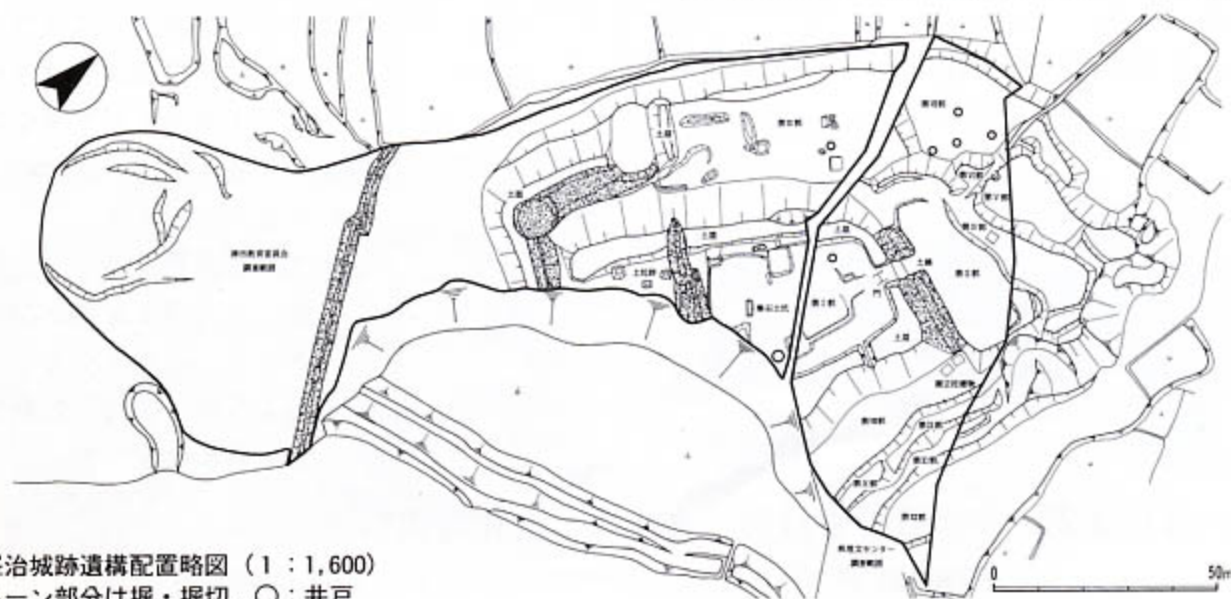


第2次調査後の峯治城跡（北西から）

発掘調査の結果、城跡の範囲は東西約200m、南北約120m、総面積は24,000m²におよぶことが確認され、市内では最大級の中世城館であることがわかりました。

さて、この城の特徴を一言で表現すると、深い空堀を二重に巡らせ、土塁を築いて防御性を重視した城であったということでしょう。尾根を南北に横切るように走る外側の堀は深さが4m近く、幅も3m以上あって侵入は容易ではありません。また、主郭のすぐ西側から北側そして東側を巡る堀は土塁の上から底までの高低差が5m以上あります。こうした西・北・東の三方向の防御の堅さに比べ、南側では堀が見当りません。こうした様子から防御の主眼は北側に向けられ、より「北」を意識した城づくりが行われたと考えられます。また、井戸やかまども確認され、出土遺物にも土師器の皿、茶釜、煮炊き用の羽釜などの日用雑器も多いことから、この城が生活の場として機能していたことが窺えます。

現在、発掘調査結果の報告に向けて資料整理を行っている最中です。今後の検討を通じ、15～16世紀、戦乱の時代の城跡の様子を詳しくお伝えできるものと思います。（中村）



峯治城跡遺構配置略図（1：1,600）
トーン部分は堀・堀切、○：井戸

遺物紹介③

津市出土の銅鐸^{どうたく}

銅鐸は、弥生時代の農耕のまつりに使われたと考えられているもので、その原型は朝鮮半島の小銅鐸に求められます。はじめの頃の銅鐸は小型で、実際に吊り下げて鳴らされていたようですが、次第に大型化して、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に変化していったといわれています。

さて、銅鐸は近畿地方を中心に、中国地方から東海地方まで分布しており、現在までに約430例が発見されています。三重県では現在までに20例近い銅鐸が出土したといわれており、津市内では、神戸、野田、高茶屋の3箇所の銅鐸出土地が知られています。

神戸銅鐸は大正6年(1917)に発見され、現在は東京国立博物館に所蔵されています。「外縁付鈕式^{がいえんつきちゆうしき}」とよばれるもので、市内で見つかった銅鐸のなかで最も古く、弥生時代中期のものと考えられています。「流水文^{りゅうすいもん}」とよばれる文様が施されており、蛙^{かえる}や魚の列も表現されています。また、兵庫県倭文、大阪府恩智^{おんち}、伝奈良県出土の銅鐸と同じ鋳型^{いぎた}で鋳造されたことがわかっています。

野田銅鐸は、江戸時代に野田の「古屋敷」とよばれる場所で発見されたもので、国学者の谷川士清^{たにがわことすが}が米1俵で買取り所有していましたが、彼の死後、高田本山専修寺に寄進されました。「突線鈕式^{とっせんちゆうしき}」といわれるもので、弥生時代後期の銅鐸です。鈕に飾耳^{かざりみみ}がないのは三河^{さんま}と遠江^{とんえい}地方を中心に出土する銅鐸の特徴で、「三遠式」銅鐸とよばれています。

高茶屋銅鐸は、昭和61年(1986)に高茶屋小森町の宅地造成中に発見されました。ほぼ原型をとどめているもの1点のほかに、破片が多数あることから、複数の銅鐸が埋納されていたとみられています。この銅鐸も弥生時代後期の「突線鈕式」に属するものですが、鈕に飾耳がつくのは近畿地方を中心に出土する銅鐸の特徴で、「近畿式」銅鐸とよばれています。のちに銅鐸出土地のすぐ西側(四ツ野B遺跡)を調査したところ、弥生時代後期から古墳時代中期^{たてあな}の竪穴住居が87棟発見されましたが、集落のそばで銅鐸が発見されることは非常に珍しく、銅鐸のまつりを考えるうえで注目されています。(村木)



神戸銅鐸 (高さ39.8cm)



野田銅鐸 (高さ64.8cm)



高茶屋銅鐸 (高さ66.3cm)

最近の発掘調査から

《山王遺跡・四ツ野遺跡・専修寺境内遺跡》

《山王遺跡》

山王遺跡は、安芸郡河芸町南黒田の丘陵地にある遺跡です。当初は、平成7年度内に調査終了の予定でしたが、大量に遺物が出土したため、平成8年度も調査を行うことになりました。

調査を行ったところは、日当たりのよい丘陵の南斜面ですが、トレンチを設定して土層断面を観察したところ、ここはもともと南向きの小さな谷で、そこに大量の土が堆積して現在のような斜面になったことがわかりました。堆積した土の中には、弥生時代から鎌倉時代のさまざまな遺物が含まれていましたが、上半からは鎌倉時代の遺物が、下半からは古墳時代から飛鳥時代の遺物がおもに出土しています。

谷の西側ではピットなども検出されていま

すが、現在のところ、建物としてまとまるものはありません。

出土した遺物は土器が多く、整理箱にして150箱以上にのぼります。そのほとんどが破片で出土しており、完形に復元できるものはわずかです。古墳時代前半ころの土師器が最も多く、飛鳥時代の須恵器や鎌倉時代の山茶碗がこれに次ぎます。(村木)



調査中のようす

《四ツ野遺跡》 津市高茶屋小森町字四ツ野

本調査を平成8年4～6月に行いました。平成4～5年に竪穴住居が90棟近くも見つかった四ツ野B遺跡は東約200mにあります。弥生～古墳時代の集落跡を予測していましたが、大正末～昭和初めの開墾で古代の地面は失われていました。しかし、中世以降に文献ではわからなかった集落が存在したらしいことなど、新発見もありました。(山口)



調査中のようす

《専修寺境内遺跡》 津市一身田町字高田

試掘調査を平成8年8月に行いました。浄土真宗高田派本山専修寺の境内、文献では現在の専修寺の前身、万治元年以前の専修寺の推定地にあたります。調査区は近世に池が造成された場所にあたり、それ以前の遺構は残っていませんでしたが、遺物には専修寺が大規模になる前の様子を窺えるものがあり、たいへん貴重な成果が得られました。(山口)



発掘された遺物

今年も小学生が埋文センターを見学

春の遠足シーズンにあたる4月18日、今年も神戸小学校の6年生104名が見学に訪れました。昨年同様、遠足コース中での見学ということもあり、真剣な表情のなかにもリラックスした雰囲気を感じられました。また、6月6日には楯形小学校の6年生38人が見学に訪れました。郷土の歴史を学ぶ目的で、埋文



熱心にメモをとる（神戸小学校）

センター見学後には小学校のすぐ前にあるメクサ古墳群を実地見学し、埋蔵文化財の身近さを感じてもらえたと思います。

熱心にメモをとる姿、土器の接合に挑戦する時の真剣な眼差し。こうした児童の意欲的な姿勢に対し、埋文センターでは今後も援助は惜しみません。



接合に挑戦！（楯形小学校）

津市の埋蔵文化財ケーブルテレビ「市政ガイド」で紹介される！

市政ガイドシリーズ「わがまちの文化財② 歴史の証人・埋蔵文化財」

津市では市政の状況を広く市民に知っていただくために、津ケーブルテレビで市政ガイドを放送しています。9月の1ヵ月間は、埋蔵文化財についての番組が放映されました。

「遺跡の発掘はなぜ行われるの？」「遺跡の有無はどうしてわかるの？」という素朴な疑問から、発掘調査の具体的なプロセスや埋蔵文化財センターの仕事、そして市内の遺跡の紹介など盛りだくさんの内容となっています。テレビでの放映は1ヵ月間に限られましたが、埋文センター見学の方には同じ内容のビデオを見ていただけるようになっています。詳しいことは埋文センターまでお問い合わせください。



最近思うこと・懐うこと・念うこと

■7月いっぱい、ひとつの現場が終わりました。調査面積1,350m²という小さな現場でしたが、分布調査から数えると実に3年以上もの間、この調査にかかわってきたことになります。この間、埋蔵文化財センターのオープンなど、自分のまわりの環境も大きく変わってきました。月日の移りゆく速さを実感する今日この頃です。(村)

■現在見られる条里制遺構のうち、古代にまで遡り得るものは意外に少ない、という発掘調査結果が各地で認められる。津市において条里制遺構を検出した六大B、橋垣内、蔵田の各遺跡の事例もすべて中世以降である。そ

れ以前の集落構成に方形プランはなく、建物の規則的配置が認められても条里方向には合わない。条里制の段階的拡大か、古代～中世に画期を認め得るか、注目している。(山)

■最近、市の文化財指定に向けて高茶屋銅鐸を実測する機会に恵まれた。何ととっても銅鐸。今までに経験もなく手探り状態での実測開始であったが、細かく観察していくうちに鐸面の文様の微妙な違いや工人の癖?なども見えてくる。自分で実際に遺物を見、そして実測する。我々の仕事の基礎がここにあることを改めて認識する。銅鐸ではなく土器の一片であっても同じ目を持ち続けたい。(中)

センター日誌抄

平成8年

1月29日《視察》氷上郡教育委員会6名

2月9日《視察》鈴鹿市6名

21日《視察》納税組合28名

収税課 3名

3月7日《視察》三雲町文化財保護委員会
1名

4月9日《視察》衛生組合3名

18日《見学》神戸小学校遠足104名

23日《視察》三重県埋蔵文化財
センター 10名

6月3日《見学》敬和公民館「寿大学」
40名

6日《見学》橿形小学校40名

7日《見学》白塚公民館「婦人学級」
20名

10日《会議》津市埋蔵文化財
パトロール委員会20名

27日《視察》文化庁1名
三重県教育委員会3名

7月1日《見学》南が丘小学校
「家庭教育学級」20名

22日《見学》河芸町教育委員会
町史編纂室1名

8月13日 津ケーブルテレビビデオ撮影

《編集後記》今号からサイズがA4判になりました。紙面が大きくなった分、情報量も(質も)アップしたいものです。今回は初めての特集号として「開発と保存」をとりあげました。埋蔵文化財の保護に携わるものにとっては「永遠のテーマ」ともいうべきものですが、これからは機会ある毎に考えて行きたいと思います。(山)

発行日:1996.10.1

編集・発行:津市埋蔵文化財センター

〒514 三重県津市安東町1225

TEL 0592-29-0210

FAX 0592-29-4601

印刷:(資)黒川印刷